

# 生きる居場所とともに

～ 孤立・孤独とたたかう 依存症支援 ～

4月、新しい門出の季節です。しかし、明日への希望を描けない人もいます。16才以上の2万人を対象に国で実施された、「人々のつながりに関する基礎調査」(令和5年)では、全体の約4～5割の人が孤独を感じているという結果が明らかになりました。

今回は、孤独の病といわれる依存症を地域で支援する、大阪市のNPO法人いちごの会 リカバリハウスいちご(以下、「いちご」)を取材。当事者の現状と、求められる支援に迫ります。



佐古恵利子さん

## 地域で回復できる場を

「いちご」は、アルコール、薬物、ギャンブルなどさまざまな依存に困っている当事者や家族が回復の糸口が見つかるよう、地域での拠点をつくり、障がい福祉サービスも活用しながら、社会参加や就労支援を行っています。

「25年前は、依存症は治らない病と思われていた。回復するためには医療だけでなく、地域で人と人がつながり、支え合える場が必要だと感じた」と、理事・統括責任者の佐古恵利子さんは当時の思いを振り返ります。

佐古さんは、精神科やアルコール依存症専門病院に長年ソーシャルワーカーとして勤務していた経験から、「いちご」を立ちあげました。

## 夢ができた はじめて感じた希望と光

「衣食住をすべて支援してもらって



木村さん

も人は生きていけない。今は夢ができて毎日すごく楽しい」と語るのは、40代で高校受験し、現在高校3年生の木村さん。自分を支援してくれた人のように、福祉の資格を取り、誰かのために働きたいという夢に向かってがんばっています。

家族もアルコール依存の課題があり、木村さんは中学生のころから不登校になっていきました。中学卒業後は親戚のついで就職しましたが、1年も続かず、その後は非正規労働や期間労働を繰り返す日々。学歴もない、職歴もない、頼る人もいない、行き場のない孤立感を抱え、寝るために飲んでいたお酒の量が増え、だんだんと頼る生活になりました。

福祉制度を利用する中で、担当のワーカーの声かけがきっかけとなり、アルコール依存症専門の病院と自助グループにつながりました。そこで、「いちご」を知り、通いはじめることになりました。



仲間とともに内職に取り組む木村さん

## ひとりではなくみんなのために みんなはひとりのために

自分を押し殺して生きてきて、死にたいとまで思った人生から、「いちご」の居心地の良さやさまざまな人との交流を通じて、福祉で働くという夢をスタッフやメンバーと語り合えるようになった木村さん。忙しい高校生活でも、休みの日には変わらず、「いちご」に通っています。

「こんなに豊かな日本でも生きづらい。役に立たない人はいない。いるだけで助け合うことができる。みんなが少

## 依存症は社会の課題 生きやすい社会をつくる

家族も家も仕事もない。肩書や立場などすべて失ってしまった人が、もう一度回復するための支援は簡単なことではありません。

「家族からの『もう死んでほしい』という泣きながらの相談を支援することもある。回復に10年以上かかる人もいます。裏切られたと思うこともある。スタッフもメンバーも人なので、思いがぶつかるときもある。それでももう一度奮い立たせる気持ちで一緒に考える。決して離さない」と佐古さんは支援で大切なことを話します。

依存症は個人の課題と捉えられがちですが、社会や周囲との関係性の中で起こる社会課題です。

失敗してもやり直すことができる、誰もが生きていける社会をつくるために、「いちご」では本の出版や講演会等で当事者の体験を伝え、依存症の正しい知識と理解の普及・啓発にも取り組んでいます。



左から佐古恵利子さん、渡邊洋次郎さん、竹内隼人さん



竹内隼人さん

しずつ誰かのために生きる社会になってほしい」と木村さんは未来への希望を語ります。

## 多様なニーズに サービスをつくる

「いちご」は20代から80代までの多様なメンバーが利用しています。開設してから25年。これまで就労支援で通っていた人が通えなくなれば生活介護事業をはじめ、DV被害に苦しむ女性があれば安心して通えるよう女性だけのユニットをつくるなど、メンバーのニーズによって居住支援や訪問介護等の事業をつくってきました。

「孤独になっていた人でも、みんなが笑って過ごせる場をメンバーと一緒につくっている」と管理者の竹内隼人さんは話します。

地域の人とつながることができると、お弁当の販売やカフェの運営、公営住宅の掃除なども行っています。人と人がかかれ合い、集団になり、地域とながる、そのような取り組みを当事者や地域、関係機関と一緒につくりあげてきました。

## 自分が生きるための居場所 自分の価値をとりもどす

「居場所」は簡単な言葉だが強い力をもつ。人は自分が生きるための居場所が必要と力強く話すのは、自身も依



渡邊 洋次郎さん

存症で、スタッフとして働く渡邊 洋次郎さんです。

渡邊さんは、20才からお酒と薬物で精神科への入院を繰り返して、刑務所に服役したことも。20代の時にも「いちご」に通っていましたが、中断してしまいました。「お酒と薬物をやめれば働けると自分の問題に気づいていなかった」と渡邊さんは当時の自分を振り返ります。

服役中にサポートしてくれた佐古さんの働きかけで、渡邊さんは再び、「いちご」に通うことになりました。朝来夕方帰るという生活リズムの大切さを改めて感じ、汗をかいて働く報酬ももらえる、そんな人並みの暮らしが送れていることがうれしく、自分にも価値があると感じることができました。働ける時間が増えてきた渡邊さんは、ヘルパーの資格を取得し、介護事業所で働きます。そして、8年前から「いちご」のスタッフになりました。

ともに生きる社会をつくるために、孤立・孤独の背景を正しく理解し、自分のことと捉え、出来ることから取り組みを進めていくことが、今、私たちに求められています。